

「コンテンツ東京 2017」が開催

神谷 直亮

リード エグジビション ジャパンが主催した「コンテンツ東京 2017」が、6月28日から30日まで、東京ビッグサイトで開催された。この展示会は、「先端コンテンツテクノロジー」「コンテンツ配信・管理ソリューション」「ライセンスジャパン」「コンテンツマーケティング EXPO」「クリエイター EXPO」「AI・人工知能 EXPO」など多彩なセクターで構成されており、総出展者数は1650社に及んだ。本稿では、これらの内の「先端コンテンツテクノロジー展」を中心にレポートする。

第3回となる「先端コンテンツテクノロジー展」で注目を集めたのは、世界的なブームになりつつある仮想現実（VR）・拡張現実（AR）・複合現実（MR）コンテンツ、ヘッドマウントディスプレイ（HMD）、ライドシミュレータ、360度ライブカメラ、ウルトラHD（4K）だ。代表的な出展者として挙げられるのは、パナソニックグループ、クリーク・アンド・リバー（C&R）、AOI Pro、ソリッドレイ研究所、タケナカ、しのびや.comであった。

パナソニックグループは、VR HMD、360度ライブカメラ、27,000ルーメンのプロジェクト、ウルトラHD Blu-ray、

バルーンカムなどを出展してコンテンツの総合的な制作・再生能力を誇示した。VR HMDは、パナソニックが総力を挙げ開発中で、220度の広視野角を誇る。実際に装着してみたら、正面に2個（視野角100度）、右左サイドに1個（それぞれ視野角60度）のレンズを組み込んで220度に広げていた。まだ参考出展と断っていたが、実用化の段階では解像度が4Kレベルに達すると思われる。

360度ライブカメラ「AW-360B10」については、「臨場感のある4K映像をリアルタイムに中継できる」と強調していた。実際に、展示会場を360度にわたり撮影して、ブースに置かれたアイパッドでライブ映像を見せていた。発売が8月からとのことで、すでに完成の域に達していると思われる。プロジェクター「PT-RQ32KJ」の実力については、400インチ相当の曲面スクリーンに多彩な映像を投影して見せることで証明していた。

ウルトラHD Blu-rayのコーナーでは、プレミアムディーガ「DMR-UBZ1」を使って、HDRとSDRコンテンツの比較デモが行われた。HDRの規格は、PQとのことであった。また、「シン・ゴジラ」「機動戦士ガンダム」「アクセルワールド」などのBlu-rayデスクの売込みにも余念がな

かった。技術的な裏付けは、スタジオマスターと同等の高諧調映像を実現する独自のMGVC（Master Grade Video Coding）にあるという。ドローン機能をバルーンボディで包んだバルーンカムに関しては、「安心・安全な演出ツール」と強調していた。

C&R社は、3月に発売した「IDEALENS K2+」と名付けたVRデバイスを出展して、来場者に体験を勧めていた。「スマホ・パソコン不要。ピント合わせも不要。世界一の装着感を持つ一体機」をキーワードに掲げたこのVRシステムは、3.81インチのOLEDパネル1枚で、解像度2.5Kクラスと視野角120度を誇っている。さらに、「バッテリー込みの重さが世界最軽量で295グラム。2秒で装着完了」とPRに余念がなかった。バッテリー収納部を後頭部に置く設計になっており、持続時間を聞いてみたら「コンテンツによるが、持続時間は2～6時間。平均4時間」との回答であった。コンテンツについては、同社が制作したゲームを4本とバラエティ映像を9本用意しているとのことであった。しばらく待たされた後に、視聴させてもらったコンテンツは、「絶体絶命」というタイトルで、部屋の天場が落ちてくる前に脱出を試みるゲームであった。

AOI Pro社は、意図して英文をタイトルにした「Wonderful World VR Private Tour」「VR Dream Match Baseball」「God Speed Motorcycle」の3件のデモを実施して目を引いた。中でもFOVE社の世界初という視線追跡型HMD「FOVE O」を使って、VR技術とセンシング技術の融合を目指す「Private Tour」のトライアルが最も注目を集めた。説明員は、「世界を旅する360度実写映像を見ることで、心と体がどのように没入していくかをセンシ



写真1 パナソニックは、4Kレベルの解像度、220度の広視野角を誇るVR HMDの試作品を公開して注目の的になった。



写真2 クリーク&リバーは、3.81インチのOLEDパネル1枚で解像度2.5Kを実現する「IDEALENS K2+」を出展した。



写真3 AOI Proは、FOVE社の視線追跡型HMD「FOVE 0」を使って、VR技術とセンシング技術の融合を目指す「Private Tour」のトライアルで注目を集めた。



写真4 しのびや.comは、VRライドシミュレータ「SIMVR」による体験の場を提供し人気を得ていた。



写真5 アタリは、トラッカーのついたグローブを装着してサンドバッグを打つ、VRボクシング体験コーナーを設けていた。

「できるのが特色」と語っていた。センシングの内容を聞いてみたら、「Attention」「Meditation」「Emotional Value」など5項目とのことであった。

ソリッドレイ研究所は、同社のVR専用ソフトウェア「オメガシップ」を駆使する2件のデモを実施した。1件は「絶叫ブランコ」で、もう1件は「滝のある湖」であった。スクリーンの前にブランコが用意されており、来場者はこれに乗ってVR体験を楽しんでいた。

タケナカは、「VR x LED360VIEW ~宇宙の華~」を目玉にして出展した。360度のLED天体映像とVRを融合させた新しい映像演出を提案したもので来場者の注目の的になっていた。長蛇の列ができており体験できなかったが、説明員によれば、「5名のグループで入場してもらい、1名のみがVIVE HMDを装着し、4名は裸眼でLEDバーチャル空間を体験してもらっている」とのことであった。同社は、この他に「ミラーPJシアター」と「フロアトラッキング~宙への道~」のデモも行っていった。「ミラーPJシアター」では、プロジェクターに回転するミラーヘッドを取り付けて、猫がネズミを追いかけるCGアニメ映像を投影して注目を浴びた。

しのびや.com社は、高機能を誇るVRライドシミュレータ「SIMVR」を6台ブ

ースに並べ、来場者に体験の場を提供していた。Oculus RiftとVIVEの2種のHMDを使う多軸モーションシミュレータで、本体価格一台89万円で販売しているという。モーションについては、「ピッチ(±11.8度)、ヨー(±10度)、ロール(±10度)の3軸回転に加えて、上下の揺れを実現するヒープ(96mm)に対応している」と説明していた。同社のブースでは、この他に「PICO」と名付けた中国製のHMDによる視聴デモも行われた。

既述の6社以外で注目を集めたのは、テクリコ、サナリス、クレッセント、アタリ、コーンズテクノロジーの5社だ。

大阪から出展したというテクリコ社のブースでは、「世界のリハビリを変える」をテーマに掲げてMRアプリのデモが行われていた。マイクロソフトのホロレンズ(HoloLens)を使いMR空間で楽しいリハビリができる「リハまる」と呼ぶアプリを開発したというのが売込みのポイントである。実際に試してみたら高次脳障害を改善するために工夫されたMRコンテンツが眼前に出現し、巧みに編成された自動リハビリメニューにすっかりのせられてしまう有様であった。

スマートフォンでVRコンテンツを手軽に楽しむ簡易型VRビューワーの専門メーカーとして知られるサナリス社は、今回、「VRシートフェザーA4」「VRシートノー

マルA4」「VRシートライトB5」の3種を紹介した。「VRシートフェザーA4」は、厚さ1mm以下のコートカード用紙とシート型レンズを使っており「製作部数1000部で、1部180円にコストダウンした」と語っていた。

クレッセントは、現在、鋭意開発中という「HEWDD-2」と名付けたHMDの試作機によるVR体験を促していた。高屈折率を誇る特殊なモノマーを使用したプラスチックレンズを採用しているのが特色である。また、モーションキャプチャシステム「Vicon」と、指の曲げ伸ばしを計測するセンサ「Cyber-Manus」と連動させる独特な工夫を凝らしているのが印象的であった。

アタリのブースは、五体で操るVRボクシングの体験デモで盛り上がっていた。来場者は、実際にトラッカーのついたグローブを装着してサンドバッグ打って感触を確かめることができるというのがミソである。

最後に珍しかったのは、コーンズテクノロジー社が、実際には存在しないがVRで見えるものに素手で触れて感じる「触感VR」の体験デモを行っていた。空間に触感を作り出す秘密兵器は超音波である。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト